

『今月の天候と農作業』

通巻第5533号
7月号
平成23年7月1日発行
宮崎県
宮崎地方气象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	20	40	40

【概要】

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

〈1週目の予報〉 7月2日(土)～7月8日(金)

天気は、湿った気流や前線の影響で雲が広がりやすく期間の中頃に雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、高い確率50%です。

〈2週目の予報〉 7月9日(土)～7月15日(金)

天気は、平年に比べて晴れの日が多いでしょう。

〈3週目から4週目の予報〉 7月16日(土)～7月29日(金)

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

〈次回の発表予定等〉

1か月予報：毎週金曜日 14時30分 次回は7月8日

3か月予報：7月25日(月曜日) 14時

普通作物

◆ 早期水稲

もうすぐ収穫時期を迎えますが、最後まで適正な管理を行い、美味しくて信頼の高い「みやざき米」の生産に努めましょう。

今年の「コシヒカリ」の出穂最盛期は、平年より数日遅れの6月28日頃でしたので、7月28日前後が収穫ピークとなります。収穫・乾燥調整機械は、事前に整備点検を行いましょう。今年の中干し時期に雨が多く、葉色も濃いまま経過した水田も多く見られます。気象災害のおそれがある場合は、農林振興局等の情報をもとに、適確な事前事後対策を行いましょう。

1 水管理

早めの落水は玄米品質が低下するので、収穫の5日前までは湛水と落水を繰り返す間断かん水を行い、根を健全な状態に保ち登熟向上に努めます。

2 収穫

早期水稲の収穫は、出穂から30日目頃、全籾の80%以上が黄化している時期を目安とします。早すぎると青未熟米が、逆に遅れると胴割れ米が発生しやすくなります。今年はお水の影響で同じ地区でも成熟期が異なる場合もあるので、ほ場ごとによく観察し、収穫時期を判断します。

3 乾燥調整

収穫後の籾は蒸れないよう速やかに乾燥作業へ移し、急激な乾燥による品質低下を防ぐために、乾燥温度は40度以下で行い、水分14.5～15%に乾燥します。

4 農作業安全

収穫作業はあせりや高温により、注意力が散漫になりがちです。ゆとりのある作業計画と適宜休憩を取る等、体調の管理と農作業安全に努めましょう。

◆ 普通期水稲

1 水管理

8月上旬から「ヒノヒカリ」の幼穂形成が始まりますので、中干しは7月下旬までには終わります。強い中干しは、根が切

れて根の活力が衰えるなど、登熟への影響が大きくなります。田面に足跡が付く程度から軽いヒビが入る程度で、中干し期間は5～7日位を目安に行います。中干しが終わり入水する時には、走水を1～2回行った後に入水します。

2 病害虫の防除

葉いもち、ウンカ、コブノメイガが発生する時期です。水田での観察と病害虫防除・肥料検査センターの予察情報を参考に防除します。

3 追肥

西白杵などは7月下旬頃から、北・西諸県では8月上旬頃からが穂肥の時期です。幼穂の長さが10^{ミリ}になったら、葉色に合わせて適量を施用します。

◆大豆

1 施肥

リン酸は根と茎葉、根粒菌の増加を促し、生育の初期から必要です。リン酸は10^{アール}あたり4^{キロ}程度施します。窒素は2^{キロ}程度です。また、大豆は土壌pH6.0～6.5を好むので、石灰を10^{アール}あたり60^{キロ}程度施用します。

2 耕起、整地

水田など排水の悪いほ場は、十分な排水対策を行い高畦にします。また、発芽を揃え、雑草の発生を抑えるために、耕耘は3回程度丁寧に行います。

3 播種

平坦地域の適期は7月の上旬～中旬です。条間60～70^{センチ}、株間20～10^{センチ}くらいに播きます。覆土の厚さは2～3^{センチ}にします。

早く播種して茎や葉を大きくすると多収が期待できます。7月下旬以降の遅めの播種になる場合はやや密植にします。

除草剤は播種直後に散布します。散布後に追播すると発芽しないので、播種もれのないように作業機の播種状況を確認しながら播きましょう。

(鎌田 博人)

果菜類

◆夏秋野菜の高温対策

中山間地域の露地きゅうり、雨よけトマト、ピーマンなどは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では梅雨明け後の高温対策が重要となります。ハウスは日中できる限り解放し換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用し2割程度の遮光を行い、ハウス内の気温を下げ果実や葉の温度が上がらないように管理します。

特に、曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるので、早朝からのかん水、翌日が確実に晴れの場合の前日夕方のかん水も効果的です。

なお、薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の障害が発生しやすいので、午後温度が低下する時間帯に行います。

◆いちごの育苗管理

年内の収量を確保するため、7月中旬までには採苗を終え良質苗の生産に務めましょう。採苗後のかん水は、晴天時は早朝に充分行いますが、乾燥するようであれば午後にも夜間に過湿にならない程度にかん水します。

子苗時期の施肥量は、多すぎないように注意し、施肥は鉢底から根が確認できる時期から行います。

今年はタンソ病の発生がやや多いとの発生予察情報がでてきます。定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には周辺の株とあわせ直ちに処分してください。また、うどんこ病についても育苗床での徹底防除が重要となります。肥料であるケイ酸カリを1株あたり2～3g[㍉]施用することにより発病を抑制することができます。

(郡司 孝幸)

葉茎菜類及びいも類

◆かんしょ

4月植付けのマルチ栽培が収穫期となります。植付け後110～130日が収穫の目安ですが、今年は天候が悪く、いもの肥大が遅れていることが予想されます。100日を経過したら

試し堀りを行い芋の肥大を確認してから収穫を始めてください。収穫が遅れると皮色や形状が悪化しますので適期収穫を心掛けましょう。

◆さといも

芋の肥大には土壌水分が大きく影響するため、かん水を行い草勢の維持に努めてください。

石川早生が収穫期となります。数株試し堀りを行い肥大を確認してから収穫を始めてください。収穫が遅れると「水晶芋」が発生し品質低下につながりますので、収穫は計画的に行い8月中旬には終了するよう心掛けてください。

中晩生種は7月上旬から子芋の肥大、孫芋の着生時期となりますので、梅雨明け頃を目安に追肥・土寄せを行ってください。

◆しょうが

普通栽培では、上旬が1回目の追肥の適期となります。10㎡当たり窒素成分で3～5kgを施用し、追肥効果を高めるために土寄せも併せて行ってください。また、梅雨明け後の高温乾燥期は乾燥害を受けやすくなるため、適宜かん水を行いますが、畝間に湛水する場合は滞水しないよう注意が必要です。

◆アスパラガス

5月から6月にかけて、親茎として伸ばした茎（立茎）で生育の悪いものは、今月の内に新しい茎に更新してください。立茎の目的は、夏秋芽への養分供給と貯蔵根への養分供給ですが、茎の更新は9月までに終えないと効果がありません。遅れないように更新しましょう。立茎する茎は、径が9～11mmのものが適しており、これより太いものや、細いものは避けてください。

（河野健次郎）

果樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

7月中旬から収穫前までが仕上げ摘果の時期になります。今年の温州みかんは、天候不順により生理落果も多かったことから、樹や園による結果量のばらつきが多くなっています。極早生温州では、7月10日の果実横径は、38～48^{mm}が理想です。結果量が多く、肥大の悪い樹については早めに仕上げ摘果を開始し、結果量が少なく、肥大の良い樹については、仕上げ摘果を遅らせましょう。

結果部位によっても摘果時期が異なります。樹冠下部は早めに、樹冠上部は遅めに摘果することで、適正な肥大を確保しましょう。

樹冠上部の天なり果を摘果すると、夏枝が発生するので、収穫時に除去しましょう。

◆完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色カビ病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を実施するとともに、枝をゆすって、花びら落としを行いましょう。

◆マンゴー

7月下旬以降の剪定は、第二新梢の充実が悪くなることから、翌年の花芽形成を悪くすることがわかっています。早めに剪定を行うよう心がけましょう。

既に剪定を終えた園では、葉面散布や新梢の整理によって、新梢の充実促進を図りましょう。

施肥は、土壌分析の結果を見てから、必要に応じて実施しましょう。

2 果樹全般

◆夏季の管理

梅雨が明け高温と乾燥が続くと、果実肥大の遅れや日焼けが発生したり、ぶどうの着色不良等が見られます。敷きワラや遮光ネット、袋掛け等で被害の防止に努めるとともに、過度な乾燥が見られる場合は、かん水を実施しましょう。

(山口和典)

花き

◆キク共通

日差しが強い日が続くと、葉焼けなどの障害の発生が懸念される時期になりますので、本ほにおいては遮光等を行い、葉温の低下を図りましょう。また病害虫が発生しやすいので、予防散布や発生初期の防除を徹底してください。親株ほ場においても防除を徹底し、苗とともにアザミウマ類やダニ類、白さび病を本ほに持ち込まないよう気を付けましょう。

◆夏秋ギク

「フローラル優香」の8月出荷では花芽分化・発達を促すために消灯後から12時間日長のシェード栽培を実施してください。期間は2週間を目安とし、その後は天葉の状況や蕾の生育を見て再シェードを行うなど調整します。夜間はシェードを解放し、気温が高くならないよう管理してください。高温や消灯遅れ、多肥によって貫生花の発生が多くなりますので、適正管理に努めましょう。

◆秋ギク電照

キクは節間伸長や生育の揃いを良くする目的で2～4度で冷蔵処理を行います。主力である「神馬」系品種は穂の冷蔵期間が長くなると定植後の活着が悪い傾向にありますので冷蔵期間は3週間を目安としましょう。「神馬66-4」「神馬2号」は高温に遭遇すると腋芽が出にくくなり、穂が不足する場合がありますので、親株床はできるだけ涼しくし、親株の株数も余裕を持って植え付けを行いましょ。

◆洋花類

秋に定植するほ場の土壌診断を実施し、分析・診断結果に基づいた施肥を行いましょ。ハウス内のたん水及び陽熱消毒を実施するなど、連作障害の回避に努めてください。トルコギキョウ、デルフィニウムは冷房施設等を利用した育苗期になりますので、適切な温度管理を実施して、早期抽だいやロゼット防止に努めてください。

◆ホオズキ

8月出荷分は上旬から段階的にピンチ・摘葉・着色のためのホルモン処理を実施してください。ホルモン剤散布の1週間前までにはアザミウマ類・ダニ類・うどんこ病等の防除を徹底してください。ホルモン剤散布後の高温は色ムラ発生の原因になりますので、散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は必ず寒冷紗により遮光してください。

◆シキミ

春に定植した苗については、梅雨明け後の急激な高温・乾燥により枯死する危険性がありますので、かん水の実施や株元に敷きわらなどを実施し、極度な乾燥を防ぎましょう。

(中村 広)

畜産・飼料作物

今月は、本格的な酷暑の時期を迎えます。曇雨天後の晴天日は気温が急激に上昇し、家畜にとって大きなストレスになるとともに、食欲不振によりその後の生産性に大きく影響することになります。これからの具体的な暑熱対策は以下のポイントに留意して、快適な畜舎環境づくりに努めましょう。

①「熱源」を減らす

西日を遮断するために寒冷紗やよしずを利用するとともに、日中の暑い時間帯の屋根への散水も畜舎内の温度低下に効果があります。また、飼育密度を少なくし除糞をこまめに行いましょう。

②「風」を利用する

畜舎内の通風を良くするとともに、扇風機等を利用して家畜の放出熱を畜舎外に運びだしましょう。

③「水」を利用する

新鮮で冷たい水を常時飲めるように工夫しましょう。また給水槽に溜まった水はこまめに取り替えましょう。

④「飼料給与」に注意する

牛は良質な粗飼料を多く給与して嗜好性を高めましょう。ビタミン、ミネラルを切らさないよう注意しましょう。

今月下旬からとうもろこしの収穫が始まります。サイレージにする場合は、栄養価も高く最適な水分含量である黄熟期

を目安に収穫しましょう。

最後に、毎月20日は「県内一斉消毒の日」です。昨年の口蹄疫発生から1年が過ぎました。県内で二度と発生させないためにも畜舎の消毒、衛生管理を徹底しましょう。

(小坂 昭三)

工芸作物

◆茶

1 三番茶摘採と病虫害防除

三番茶の摘採は、二番茶摘採から30～35日後が目安です。この時期は硬化が早く、摘採期の幅は同一品種、条件で3日程度です。摘み遅れに注意し、相場と経費を考慮した計画的で無理のない摘採を心がけましょう。特に、気温が高いため生葉管理に注意し、葉傷み等のない茶の製造に努めましょう。

一番茶後の中切では、中切り後55日頃と8月上旬までに2回、二番茶後中切りでは1回を目途に3～5芽程度に、芽数確保のため整枝します。特に芽揃いを良くするために、遅れ芽、徒長枝が多い場合、秋芽にかからないよう8月中旬までには整枝しましょう。

スリップス、ウンカ類等の吸汁性害虫や、ハマキ類が多い時期です。また、クワシロカイガラムシが多発し被害が懸念される茶園では、幼虫ふ化初発を確認し、初発7日後を目安に、輪斑病は摘採直後に地区の防除基準に従い実施してください。

2 幼木園の管理

定植初年目の幼木は根域が浅く、梅雨明け後の干害が心配されます。

植え込みが浅く、ポット上部が出ているとポット内の土が乾燥し、枯死するため、埋め込みや土寄せし、敷きワラ等で被覆しましょう。

台風の影響が大きい1～2年生の幼木園では、7月中～下旬までに徒長枝の摘心又は、せん枝をしておきましょう。

また、ソルゴーの間作は防風効果が高く、台風対策に有効です。7月上旬までに播種してください。

(岩切健二)

◆しいたけ

伏込地の湿度管理と高温対策を徹底し、しいたけ菌糸をまん延させ、害菌の侵入を許さない健全なほだ木づくりに努めましょう。

1 裸地伏せの場合

笠木を厚さ30センチ程度に補充し、直射日光による高温障害に注意するとともに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置しましょう。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害を受けやすいため、遮光ネットによる庇陰の調整や散水などにより、温湿度の管理を徹底しましょう。

4 病虫害の防除

この時期は、害菌や害虫が活動しやすい時期ですので、ほだ場の巡回を行い、防除に努めましょう。

(田中 貴司)

◆葉たばこ

今月は、総掻きが主な作業となります。熟度を重視した収穫に努めるとともに立枯病のクジリ取り、流れそうな合葉の拾い取り等、完全収穫を行い品質向上と収量の確保に努めましょう。

1 総掻きは、未熟葉の収穫を避け、十分に熟度を進めて行い、本葉の最上位葉の成熟を確認して開始しましょう。成熟の目安としては葉色でなく、葉や中骨が以下の状態になっているか確認してください。

① 葉が凸凹になり葉先が枯れる。

② 中骨が白化してミゾができ、ポキッと明音がして折れやすくなる。

2 農薬は農薬使用基準に則り適正な農薬使用に努めましょう。

3 残幹根は土壌中の菌密度増加につながりますので、収穫終

了後、早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めてください。

4 異物・異臭・虫害発生防止のため、定期的な確認と作業場の清掃を行い、必要の無い物は作業場・貯蔵場所に置かないようにしましょう。

また、早期買入に向け、水分・異物・虫害の確認を行い、出荷包の事前準備を行いましょう。

(中矢恭輔)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

なになに農業アラカルト

ハウスの土壌管理

ハウスでの栽培作物の収量・品質を引き上げるためには、健全で生産力（地力）の高い土づくりが必要です。土壌診断に基づいた適正な施肥を行うとともに、有機物の施用や深耕など、次作に向けた土壌管理に取り組みましょう。

◆ 湛水による土壌改善

ハウス栽培では連作により各種養分が過剰に蓄積されることが知られていますが、併せて土壌粒子の細粒化等による三相分布（固相、気相、液相）のバランスが崩れ、根の生育環境が悪くなっている事例も見受けられます。これらの改善対策として湛水は最も簡易で効果的な方法であり、土壌の物理性、化学性の改善が期待できます。

処理方法は、ほ場に湛水後、軽くロータリー耕を行い1ヶ月程度湛水を続けてください。特に、中期展張ハウス等では常時ビニルで被覆されているため、土壌の劣悪化等が懸念されますので、最低でも2年に1回は湛水を行うようにしてください。

◆ 土壌の深耕

根がスムーズに生育するためには、作土層の確保が重要となります。このため、作土が浅い、排水が悪い、作土の下に硬い層がある等のほ場については、深耕を行う必要があります。作土層の厚さは20センチ以上が望ましいため、浅いほ場ではロータリーを深目にしてゆっくりと耕耘します。場合によっては深耕ロータリーやプラウ耕により望ましい作土層を確保します。

深耕は一度に深く耕起すると下層の不良土が作土層に混入し、かえって生育不良となる場合があるため、5センチ以下にとどめ、たい肥等の有機物を増施してください。

◆ 有機物の施用

土づくりの基本となるのが、たい肥等の有機物の投入となります。たい肥等の有機物は、土壌の地力要因である化学性、物理性、生物性の全てにおいて効果が期待できる万能な資材と言えます。

有機物の施用効果は化学肥料等に比べると効果が見えにくく緩やかなため、おろそかにされがちですが、人間の健康管理と同様に、日頃の地道な管理が経営の安定につながる近道となります。たい肥の施用量は作物によって異なりますが、完熟したものを、最低でも定植1ヶ月前には投入しておくことが必要となります。

また近年、稲ワラ等を施用するほ場が減少していますが、粗大有機物である稲ワラは、土壌改善効果が高いので、土づくり資材としての活用を行ってください。なお、稲ワラ施用については、施用後30日間は腐熟する際、ほ場の窒素を取り込むため、たい肥と同様に定植1ヶ月前までには投入するようにしてください。

(郡司 孝幸)

地力要因と維持手段とのかかわりあい

地力要因		維持手段					
		有機物	輪作	客土・深耕	湛水	改良資材	化学肥料
化学性	養分供給	●		●	●	●	●
	養分の持続的供給	●		●	●	●	●
	緩衝能、pH等	●		●	●	●	●
	毒性物質の除去	●		●	●		
物理性	保水性、透水性、通気性	●		●	●		
	易耕性	●		●	●		
	耐食性(表土の流出抑制)	●	●				
生物性	有機物分解・窒素固定等	●	●		●		
	病原菌、害虫の抑制	●	●		●		

堆肥・稲ワラ等の施用量の目安

(t/10aあたり)

種類 作物名	堆きゅう肥	稲ワラ	バーク堆肥	牛糞オガ クズ堆肥	豚糞オガ クズ堆肥
きゅうり	3～5	1～1.5	3～6	2～6	3～5
ピーマン	3～5	1～1.5	3～6	2～6	3～5
ナス	3～5	1～1.5	3～6	2～6	3～5
トマト	3～5	1～1.5	3～6	1～3	1
メロン	3～5	1～1.5	3～6	1～3	施用をさける
イチゴ	3～5	1～1.5	3～6	1.5～3	施用をさける

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	穂いもち ※※ 紋枯病	やや多 並	<p>今年梅雨入り後の降水量が多く、いもち病の発生が多いため注意報を 発表しています。葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期 の防除を確実にを行います。</p> <p>カメムシによる被害は、早期米の等級格下げの重要な要因です。穂揃い 期とその7～10日後の2回防除を徹底します。多発して防除後も残存虫が確 認される場合は、さらに追加防除を行います。</p>
	斑点米カメムシ類※	並	
普通期水稻	葉いもち ※	並	<p>移植時に箱施薬をしていないほ場では、防除が手遅れにならないように 注意します。</p> <p>今年はまだトビイロウンカの飛来は確認されていませんが、今後とも当 センターの発生予察情報等に注意してください。</p> <p>コブノメイガは、飛来世代の次世代の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが 効果的です。</p> <p>スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を 行います。</p>
	ウンカ・ヨコバ イ類 コブノメイガ スクミリンゴガ イ	並 — やや多	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類	並	<p>アブラムシ類は、各種のウイルス病を媒介しますので育苗期から周辺の 寄主植物を含めて防除します。育苗施設は野外からの飛び込みを防ぐため に、寒冷紗や防虫ネット等で被覆すると効果的です。</p> <p>フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺数が多く、注意が必要 です。ふ化直後に葉裏で集合して加害しますので、この時期の発見に努 め、若齢幼虫期に防除を行います。</p>
	ハスモンヨトウ 等チョウ目害虫 ※	やや多	
ウリ類	黄化えそ病	—	<p>媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期 的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。</p> <p>本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの農林振興局・西臼杵支 庁（農業改良普及センター）または当センターまで連絡をお願いします。</p>
いちご (親株)	炭疽病 ※※	—	<p>親株から採取した葉を検定した結果、過去6年間で最も高い発生であ り、注意報を発表しています。親株における本病の検定に努め、感染が確 認されれば適切に処分するとともに、健全な親株への定期的な更新に努め ます。</p>
果樹全般	果樹カメムシ類 ※	やや多	<p>6月下旬のフェロモントラップによる誘殺数は、平年より多い傾向にあ ります。成熟の早いナシ・ブドウ等の果樹類を集中して加害する恐れがあ りますので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。</p>
カンキツ (露地栽培)	黒点病 かいよう病	並 並	<p>かいよう病は、発病した枝葉は可能な限り除去し、園外に持ち出し適切 に処理します。また、台風接近時は、事前散布に努めます。</p> <p>いずれも、生息密度が高くなると防除が困難になるので、早期発見・防 除に努めます。</p>
	カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ	やや多 並	
茶	炭疽病	並	<p>三番茶芽の萌芽期～1葉期に防除します。</p>
	カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	やや多 やや多 やや多 並 並 並 やや少	<p>カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が 困難になるので、早期発見・防除に努めます。</p> <p>チャノコクモンハマキとチャハマキの防除適期は、初蛾最盛期の7～ 10日後で、両種の発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能で す。</p> <p>クワシロカイガラムシの防除適期は、幼虫ふ化最盛期です。時期を逸す ると防除効果が低くなりますので、ふ化状況を確認してから薬剤散布を行 います。</p>
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※については防除情報、※※は注意報を発表していますので、詳しくはホームページをご覧ください。 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnp.ne.jp/miyazakiです。</p>			